

サイエントロジーは 宗教なのか？



研究報告

by

デーン M. ケリー
宗教の自由に関する顧問
全米キリスト教会協議会
1996年6月

サイエントロジーは
宗教なのか？



サイエントロジーは宗教なのか？

目次

はじめに	1
セクションI：観察	2
セクションII：法廷の評決	4
セクションIII：規制 対 宗教	5
セクションIV：宗教の定義	8
セクションV：思想体系	10



研究報告
デーン M. ケリー
by
宗教の自由に関する顧問
全米キリスト教会協議会
1996年6月

サイエントロジーは 宗教なのか？

はじめに

この報告の著者は、サイエントロジーが法的に宗教であるかという問いについて研究するよう、カリフォルニア州のサイエントロジー教会から依頼されました。著者はこの依頼を承諾し（無報酬で）、米国各地のサイエントロジー教会を著者自身の選択に基づいて訪れ、あらゆる層の信者たちとの会見によって研究を行いました。

1980年の6～8月にかけて、カリフォルニア州サクラメント、ニューメキシコ州アルバカーキ、ワシントン D. C. およびフロリダ州クリアウォーターのサイエントロジー各施設で、無作為に選んだ21人との会見を行いました。各会見では、回答者がいかにしてサイエントロジーと出会ったか、今、どのようにこの運動と関係しているか、自身の人生においてサイエントロジーがどのような機能を果たしているのか、そして人間の存在に関する究極の問い掛けを理解する上で、どのように役立ったかについてを聞き出そうとしました。

会見の目的はサイエントロジーの教えや信条を判定するのではなく、サイエントロジーがその信者たちのために何をしているのかを判定することでした。その取り上げ方は、非神学的組織が「宗教」としてその財産の税金控除を受けられるかどうかを確定するために行われた、カリフォルニア州で行われた裁判、人類友の会 対 アラメダ郡と似ています。

したがって、そのような場合の唯一の問い掛けは客観的なもので、正統派宗教への信心が、その信者の人生の多くを占めているのと同様に、その信仰が信者の人生の多くを占めているか、そして、税金控除を要求するグループが宗教的と認める行為を行っているかどうかを検討します。

153 Cal. App.2d, 6920

回答者には男性13名と女性8名が含まれ、内8名は教会就労者（聖職者？）、13名はパートタイマー（平信徒？）です。ここにはこの運動に関わってからまだわずかに1年ほどの人もいれば、長年（18～20年）関わってきた人もいます。各々の回答にはさまざまな違いがありましたが、最後の

追記：著者は、アメリカ合衆国の全米キリスト教会協議会における宗教の自由のための役員（1960-1990年）および宗教の自由顧問（1990年-）です。著者はこの研究とその調査報告に関して唯一完全な責任を担います。それらは全米キリスト教会協議会やその会員宗派に帰属するものではありません。

会見にたどり着くまでには「新しい」題材はあまり出て来ず、ほとんどが先に会見した人たちの情報や経験の繰り返しでした。それによって、質問から引き出される回答の数々が出し尽くされたという感触を覚えます。

会見者は会見の目的を「打電」することなく、可能な限り、率直に質問をし、回答者が言及する用語や概念に関しては、会見スケジュールに則して冷淡に会見を打ち切ることなく、さらに推し進めて質問しました。質問は回答者自らがそうするまで、「宗教」に言及せず、「サイエントロジーがあなたのためにどう役立ったか」について焦点を当てました。

セクション I： 観察

いくつかの観察結果が繰り返し様に、そして顕著に現れました。

1. サイエントロジーは回答者たちの人生にとって、非常に重要なものになりました。それは彼らが自らの考えをまとめたり、仕事、人生設計をする上で、中心のかつ見たところ非常に建設的な位置を占めています。多くはサイエントロジーで常勤者（スタッフとして、「聖職者」か？）となり、そうでない人たちは、彼らの定職から休暇や延長休暇を利用して、サイエントロジーでのさらなるトレーニングやカウンセリングを受けることに専念しています。また他のサイエントロジストらと個人事業に携わる者もあり、（ある音楽バンドのプレーヤーの場合、そのバンドメンバー全員がサイエントロジストになりました）。
2. サイエントロジーによって薬物中毒、アルコール依存症、挫折感、虚無感、鬱病、徒労感からの「離脱」を成し遂げた人たちもいます。これは簡単な仕事ではありません。（自らをひどい「薬物中毒者」であったとする若者は、薬物を買うために犯罪に頼っていたと言い、犯罪行為をやめて職に就き、サイエントロジーのコースの数々を受講し、薬物からはすっかり離脱したと話しました。他の数人も、薬物の使用を続ける限り、サイエントロジーを行うことができないと言われ、薬物から離脱しています。）
3. サイエントロジーが彼らに及ぼす影響の主要点は、彼らが「精神的存在」であり、その身体や心から独立しているという確信を持つに至ることです。それ故に死を恐れる必要はなく、ただ単に現在の身体を「放棄」し、新しい身体と取り換えるだけとなります。
4. サイエントロジーに対する彼らの態度は、一般的にかなり実利的です。つまり、それは対人関係やコミュニケーション、自己意識における日々の問題に対処する上で彼らにとって「役に立った」ということです。さらに、より「精神的」側面（彼らの言葉による）においても実用的な観点を持ち、「もしそれが自分の役に立たなければ放っておきます」。個人の経験の中で真実だと立証された教えのみが真実だと見なされます。そして、「精神的」発見のレベルには（今のところまだ？）到達していない者もいます。（ある若い男性は輪廻について「聞いたことがある」と言い、しかしそれは、自分にとっては特に有益なことでもなく、重要でもないと続けました。）

5. 「オーディティング」の過程は (カウンセリングはその受け手が「Eメーター」[ホイトストーン・ブリッジ] に固着した伝導体を両手に持って行われ、これはカウンセリングにおける主観的な題材によって左右されると信じられている皮膚の電流伝導性の変動を示す)、彼らのサイエントロジーにおける経験上での中心的なもので、それを「懺悔」の実践と捉える人もいます。彼らは、それが非常に療法的であったと感じており、人はEメーターを欺くことができないため、オーディティングを他の形態のカウンセリングより優れたものにしていきます。
6. 会見中、「倫理」に言及することが度々ありましたが、通例、それは明確あるいは型にはまったものではありません。
7. サイエントロジーの在来型の「宗教的」側面に関しては、礼拝堂、聖職叙任式、聖職者の服装、十字架様のシンボルなどが挙げられますが、それらは極めて些末なように見受けられます。(「ああそうだ、言われて思い出しました。ここでは日曜礼拝サービスもやっています。」)
8. 創設者 L. ロン ハバードに関しては頻繁に言及して褒めそやし、敬虔な態度とも言えるほどで、氏の写真が至る所に飾られています。氏はサイエントロジストが学ぶ資料の膨大な大要を著作しました。すべてのサイエントロジー施設には空席とはいえ、きちんと設備が整えられた氏のオフィスが設置されており、机の上には「コモドア」の金モールの帽子が置かれています。
9. 回答者の以前の宗教的關係および他の宗教に関しては、おおむね敬意を持ってなされており、サイエントロジーは他の宗教と両立できることが繰り返されました。他の宗教が理論のみであったことを、サイエントロジーでは簡単にそれを「応用」するのです。回答者の中にはまだルーテル教会やメソジスト教会の信者である人たちもいましたが、それほど熱心な信者ではなさそうです。回答者のほとんどが (別の?) 宗教の信奉者というよりは「サイエントロジスト」として自らを表現します。
10. 回答者の多くは、以前の宗教に不満があったと述べています。彼らの問い掛けに対して満足のいく答えが得られなかったからです。彼らはしばしば何を信じるべきかを言われるばかりで、彼らの問い掛けに対する答えを直接経験することはありませんでした。故に、サイエントロジーに出会うまでは常に「探求者」のままでした。サイエントロジーでは答えを与えられたり、何を信じるべきかを教えられるわけではなく、自らの経験を通して答えを見付ける能力を身に付け、彼らの欲求は明らかに満たされました。彼らは繰り返し「第8のダイナミック」に言及しましたが、それに関連するとされる「神」や「至高の存在」についてはあまり言及しませんでした。しかし、サイエントロジーは神や「第8のダイナミック」の明確な内容についての定義はしておらず、それを個人が発見することに任せている、と彼らははっきり主張しました。
11. 他のサイエントロジストのために結婚式を挙げたり、自身の結婚式をサイエントロジー「聖職者」によって挙げてもらったりするサイエントロジストもいました。

セクション II：法廷の評決

上記の観察は、「宗教」のさまざまな定義に照らして考慮することができます。3つの定義をここで使います。まず最初に人類友の会についてカリフォルニア州裁判所によって定められた定義です。その判決によると、

宗教は単に以下を含む：

(1) 必ずしも超自然的な力に対するものではない信仰。(2) カルト、信仰を公然と表現する集団。(3) 信仰を遵守することから直接生じる道徳的実践の体系。(4) 信仰の教義を遵守するためのカルト内の組織。

153 Cal.App.2d 693 (1957年) 複写提供

A. 必ずしも超自然的な力に対するものではない信仰：法廷は信仰の程度には言及しませんが、宗教は伝統的に人生の意義や目的、宇宙の本質や宿命、そして死後、生命は存続するのかなどといった「究極」の問い掛けに取り組みます。サイエントロジーは、これらの質問のいくつかに答え得る詳しい概念的枠組みを提供します。すべてが明確に表示されているわけではありませんが、それに関して信奉者の不安はあまりないようです。サイエントロジーは、しかしながら明白に死についての問いを論じます。そしてそれは新プラトン主義やクリスチャン・サイエンス（身体の現実性や重要性を否定する）、また東洋の伝統のいくつか（輪廻転生）と同様です。他の宗教のように（仏教、儒教、道教）、存在、自然界、超自然界においてふたつの順序や段階を熟視しません。それはただひとつです。「第8のダイナミック」あるいは「至高の存在」に関する詳細な概念的内容を提供することをしません。しかし、法廷によって宗教と認められた集団のいくつか（人類友の会、ワシントン倫理会 (249F. 2d 127)、倫理的文化と世俗人文主義 [トルカソ対ワトキンス、脚注、367 U.S. 488])とは異なり、その余地は残します。

B. カルト、信仰を公然と表現する集団：ここでの「カルト」とはどのような意味でしょうか？オックスフォード英語辞典では「カルト」を次のように定義します。

1. 崇拜—1683年。

2. 独特の形式を持つ宗教的崇拜、特に、その儀式や祭式の外見に関して—1679年。

サイエントロジー教会で行われる崇拜には、ユダヤ・キリスト教の観点から見て、見せかけはありません。各サイエントロジー施設には礼拝堂があり、そこでは少数のサイエントロジストたちが日曜日に集まり、講義を受けたり、特別な課題についての録音を聞いたりします。回答者たちはこの実践がサイエントロジーにおいて、また在来型の崇拜がそこで行われていることについて、それほど重要だとは思っていないように見えました。

しかし、サイエントロジー全体は「信仰を公然と表現する集団」であり、いくつかある社会的集会（礼拝サービスを含む）は「集団的」（個人的または一対一に対して）活動です。これらは「第3のダイナミック」（グループとしての生存）の活動として明確に特徴付けられています。

C. 信仰を遵守することから直接生じる道徳的実践の体系：サイエントロジーは「倫理」に関する膨大な文献を持ちます。それは法廷が道徳的「実践」として言及していることに当てはまると思われます。そこにはサイエントロジーによる倫理基準から外れた信奉者の相談に乗る「倫理担当官（エシックス・オフィサー）」までいます。（法廷による論点に反して、アニミズムやある形態のヒンズー教など、一般的に認められている宗教の数々は倫理上の重要性を持たず、通常、儀式上での信奉者による [非倫理的な] 品行や行動、または機嫌取りのような性質を持つ体系を押し出します。）

D. 信仰の教義を遵守するためのカルト内の組織：サイエントロジーは、「信仰の教義を遵守するための広範で精密な組織」なしにはあり得ません。（もし「カルト」が「崇拜」を意味するとすれば、「カルト内」が何を意味するのかは分かりにくいものです。）すべてのサイエントロジー施設では、スタッフの各オフィスや機能を縦列に示した大きな図が壁に設置されており、昼勤者と夜勤者それぞれが分かれた図を持つ施設もあります。（すべての部署がいつも埋められているわけではありませんが、ほとんどの部署が大抵は埋められているようです。）その巨大で林立した組織はサイエントロジーの事業を遂行するために存在しており、その事業の基本は信奉者を採用し、サイエントロジーの実践についてトレーニングすることです。しかしながら、その実践が「宗教」であるかどうかは、それが実践を遂行する組織を持つかどうかによっては決定されません。その実践がいかなるものであるかによって、またいかなる信仰を遵守し、伝道するかによって決定されます。これについては上記の項目Aにて説明しました。

「人類友の会」に関する法廷裁判で非常に「平易に」用いられた「宗教」の定義は、ここでの目的には全くそぐいません。それにはすでに公認された宗教が持たないいくつかの要素（崇拜、倫理）が含まれるからです。また「カルト」の意味するところが明解でもなく、首尾一貫もしていません。（2）で言うところの「カルト」は（4）の「カルト内」と同じ意味合いを持つのでしょうか？（2）で言うところの「集団」が（4）の「カルト」内の組織とどう異なるのでしょうか？この定義はどのような「信仰」をもってして宗教と見なすかについて具体的に指し示してはしません。哲学、倫理学、心理学、政治学、科学技術からの区別をする上で、これはより明解にされる必要があります。

セクション III：規制 対 宗教

国税庁は、宗教について13項目から成る記述をしていることが報告されています。この記述は公式の規制として形式化されたものではありません。それには13項目にわたる特徴や基準が示され、「宗教」と見なされるためにはそのすべてが満たされなければならないと寛容に述べています。（出所：ブルース・ホプキンス、免税組織に関する法則 134 [第3版1979]）

1. 明瞭な法的存在：サイエントロジー教会は正式に、アメリカ合衆国内およびその他における管轄権下に統合されています。(少なくとも国内においては聖公会やユナイテッド・メソジスト教会のように、公認された宗教や教会の中には統合されていないものもあります。)
2. 認識される信条と礼拝形式：サイエントロジー教会は正式な信条を持ち、それは教会内にて掲示されています。上記で指摘した通り、サイエントロジーはユダヤ・キリスト教型の礼拝形式を持たず、持つ振りもしません。
3. 明確、明瞭な教会運営：前述のように、サイエントロジー教会は緻密な地域的、全国的、国際的な組織運営制度を持っていますが、それが「教会の」であるか否かについては、それが「宗教的」であるかどうかには懸かっています。
4. 教義と規律に関する正式な法典：ローマ・カトリックの規律である教会法を除いては、「教義と規律」体系においてサイエントロジーの正式指令や手引きほど膨大なものはありません。それが国税庁の意図する「教義と規律」であるか否かに関しては、またその内容が「宗教的」であるかどうかには懸かってくる。
5. 明瞭な宗教的歴史：この基準もまた循環します。サイエントロジーは、1950年代初頭におけるその発端からの発展を包括する、かなり「明瞭な」歴史を持ちます。しかし、これが「宗教的」とされるか否かはそれが「宗教」であるかどうかによります。
6. 他の教会や宗派に関係しない会員資格：排他主義の特性は、近年における西洋の宗教のほとんどに見られるものですが、紀元前200年-紀元200年にかけてのローマの「神秘的」宗教にはそれがありません。一個人が古代ペルシャの太陽神ミスラヤ、古代エジプトの豊穡の神、イシスとオシリス、また、シラキューズの暴君ディオニシウスを同時に信仰することができるのです。相互の排他主義を持たないことは、いくつかの東洋の宗教の特徴でもあります。サイエントロジーは西洋の宗教のほとんどが行うように、それが「唯一」の信仰の在り方であると主張しません。しかし実際には、信奉者の注意を先取りし、他の宗教信仰への興味を除外し、信奉者の宗教的欲求や興味を満たしているように思われます。
7. 既定の学習過程を修了後、選ばれて任命された聖職者がその教会員に奉仕する完全なる組織：何がサイエントロジーにおいて豊富にあるかと言えば、それは「既定の学習過程」を修了した「叙任聖職者」です。「スタッフ」またはフルタイムの実践者、および「平信徒(?)」またはパートタイムの実践者が占める割合は非常に高く、「ミッション」でスタッフ数が5~6人、「教会」では数十人、ロサンゼルスやクリアウオーターのような主要センターでは数百人となります。サイエントロジーの中核は「既定の学習過程」であり、それにはオーディターとしての資格を得るために必要な「聖職者コース」も含まれます。「教会員に奉仕する」という言い回しはそれを適用することがより困難です。聖職者とサイエントロジーの教会員との間には、プロテスタント宗派のほとんどがそうであるような一対一の関係がないからです。その型はどちらかという、何人かの牧師や修道女が教区内の数百、数千人の教区民に集合的に奉仕するローマ・カトリック教区のような

なものです。(一方、承認された宗教の中には保守的なクエーカー派やキリスト教会、科学者などのように「聖職者」を全く持たないものもあります。また、説教師が「既定の学習課程」を修了する必要のない宗教もいくつかあります。)

8. 独自の文献：この特質を持たない宗教もありますが、サイエントロジーは持っています。それが「宗教的」文献を意味するのであれば、サイエントロジーには「独自の文献」が山ほどあり、それを持たない宗教すべてに二重に供給できるほどです。
9. 崇拜のために設立された場所：全国の至る所に多くのサイエントロジー施設や設備が設けられています。それらは慣例的に理解される「崇拜の場所」ではありません。それらが宗教の実践の場として見なされるかどうかは、サイエントロジーが宗教であるか否かによります。
10. 正規の教会員：サイエントロジーにはかなり安定した数の教会員たちが継続的にサイエントロジーのコースやカウンセリングを受けにやってきます。教会員のすべてあるいは大多数が、団体活動のために集まることが求められるような集会は多くはありません。サイエントロジーのコースに登録する人たちは、申請者を「サイエントロジー教会国際会員」として記述する書面に署名します。申請者、登録者、会員たちのそういった記録はすべて保管され、彼らのほとんどは段階が無尽蔵にあるようなオーディティングや、「ブリッジ」と呼ばれるトレーニングを通して、長期または短期における進歩を見せます。より高度の段階は、ロサンゼルスとその他少数のセンターで提供され、最高の段階は西半球における教会本部であるフロリダ州クリアウォーターでのみ提供されます。

したがって、各サイエントロジー・センターはかなり安定し、継続的な教会員を持ち、それは在来型宗教の「正規教会員」における就任、離任、耐久、衰退に似通っていると言えるでしょう。彼らが従来の教会員に相当するか否かは、やはりサイエントロジーが宗教であるかどうかによります。

11. 定期的な宗教サービス：前述したように、サイエントロジーにはかなり定期的に日曜礼拝サービスがあります。または回答者がそのように報告しています。それは「崇拜」として特徴付けられるものではありませんが、もしサイエントロジーを宗教とするならば、「定期的な宗教サービス」として資格付けられるでしょう。礼拝サービスと礼拝堂、聖職者の服装、形態の異なる十字架、聖職者の称号や用語などは、サイエントロジー自身が生み出したものというよりは、一般に行き渡った在来型の教会の形態からの借り物のようです。¹しかし、多くの新宗教は「保護色」として古い宗教から借り物をします。バプティスト派とクエーカー派は当時の在来型の宗教の象徴や聖職者に頼ることなく、最終的には宗教として認識されるようになりました。しかし、彼らはその過程に

1. 組織自体の歴史よりも真正なものは、この組織に広く浸透している航海の象徴です。それはL. ロン ハバードが、彼の最も親密にしていた門弟たちと共に海洋で過ごした時代の名残とされています。この船上の郷愁が「シー・オーグ」と呼ばれるエリート集団において息づいており、そのメンバーたちは勤務時に準航海的のユニフォームを着用し、教会における最高の指導的位置を占めます(ローマ・カトリック教会である期間に行われた修道院の序列制度に似通っています)。「シー・オーグ」の各メンバーは、「10億年」の連続した生命を通じてサイエントロジーに奉仕する契約に署名しています。それは単に象徴的な声明かもしれませんが、それはサイエントロジーに独特なもので、他の宗教には見られない時間の次元を超越した趣を添えています。何らかの形の輪廻転生を予想する他の宗教でさえ、最も献身的なそのエリートたちに生涯を通じた常勤を何千年にもわたって確約させるようなことはありません。

において深刻な迫害を耐え忍びました。新しい宗教はその生存のために、古い宗教の付属物を模倣する必要があるべきではなく、それ自体のあるがままを受け入れられるべきでしょう。いずれにせよ、サイエントロジーが宗教であるかどうかを決定するに当たって、これら象徴的な要素は私の結論を左右しませんでした。

12. 若者の宗教指導のための日曜学校：この項目における根拠は希薄で矛盾します。サイエントロジーには「若者の宗教指導」のための学校はないという人もいましたが、少なくともひとり、そのような学校があり、自分の子供たちをデトロイト市の学校に入れたと言っています。中には成人にのみ適応される宗教もあり、そのような学校は持っていません。この判断基準はまた循環します。学校での指導（学校が存在する場合）が「宗教指導」であるかどうかはサイエントロジーが宗教であるか否かという先立つ問いに依存するからです。
13. 聖職者養成のための学校：もし養成された人たちの機能が「聖職者」であるとすれば、サイエントロジー自体が大きく無限に等級付けられた聖職者養成のための「学校」です。そしてここでまた、彼らが「宗教」を取り扱っているか否かの問いに至ります。

前述のほとんどの根拠は決定的なものではなく、何をもって「宗教」とするか？ というまさにその問いに懸かっています。人類友の会についての定義は他の法廷では採用されていませんが、アメリカ最高裁判所は内容や構造によるのではなく、その機能によって「宗教」と認識する上で、その方法に従い、その結果を借用したとも言えます。（アメリカ合衆国 対 シーガー、380 U.S 163 [1965年]、ウェルシュ 対 アメリカ合衆国、398 U.S 333 [1970年]、トルカソ 対 ワトキンズ、376 U.S 488 [1961年] 参照）

国税庁の基準は循環するだけでなく、非常に型にはまったものです。それらは税金逃れのための通信販売聖職者をふるいにかけるといった立派な目的のために複雑なものとなっています。

これらの基準によれば、一組織が宗派として発展していくには、最も一般的に認められた主要な教会の型式を模倣することが要求されます。彼らは、この構造から大きく外れている数多くの宗教組織がアメリカの教会として長く認められてきていることに気付いていません。キリストやその使徒たちは間違いなくこれらの基準には則していません。宗教を定義する上で、それがすでに発展した状態を基本にすることは恐らく賢明ではないでしょう。というのも、その初期の状態が最も流動的であるだけでなく、通常、最も繊細で重要であるからです。まさにその時にこそ、つまり、このサナギの状態にある時にこそ、特有の宗教は宗教保護の恩恵にあずかる必要があるのです。

ワーキング、シャロン、「『宗教』と『宗教施設』米国憲法修正第1条」7:2 ペーパーダイナ法再審理 344-345 の下

セクション IV：宗教の定義

米国の法体系はこれまで200年以上にもわたって、公式な宗教の定義を持たないまま存在してきました。そして、いかなる法廷や諸官庁もそれを定義付けることが義務であるとは考えないよう望ん

でいます。それが新しく出現してくる宗教すべてを無理やり画一的なものにしてしまう傾向にあるからです。さらに、「宗教」が民事法の範疇に入ることが望ましいと、幸いにも、また賢明にも米国憲法修正第1条の立案者によって見なされるとすれば、原告にその特典を与えるか否かについての条件は民事行政官によって適用されなければなりません。たとえその特典が質素なものであってもです。

「宗教」という用語は、米国憲法修正第1条で定義される必要はありませんでした。それが何であるかは一般的に広く知られていたからです。今日でさえ、訴訟の95パーセントにおいて、「宗教」が何であるかについてはさほどの混乱はありません。問題は、慣例に従わない新宗教や団体を宗教であると主張するにあたって、混乱を招く恐れのある問いです。これらの事例において民事行政官は、すでに宗教と承認されている組織との相似に言及することができます。しかし、それがいかに困難であるかは前述の通りです。また、どれほどの相似性が必要なのでしょうか？類似性の要素は不可欠ですが、何が任意のものとされるのでしょうか？そして、どの典拠からのどの根拠を拠り所にして、行政官は判断を下すべきなのでしょう？

最高裁判所は賢明にも、行政官は原告の信仰について真実であるか否かを決定してはならないと結論を下しました。(アメリカ合衆国 対 バラード、322 アメリカ合衆国1978年[1944年]) また、それが有神論的であるか否かも決定してはならないとし、(トルカソ、シーガーおよびウェルシュ、上記引用) 教義や信条の内容についての尋問も許されないとしました。(長老教会 対 メアリー・エリザベス・ブルー・ハル記念長老教会、393 アメリカ合衆国、440 [1969年]) ある集団が宗教として認められる前には、恐らく、始めにもう少し立ち入った調査を企てることは許されるかもしれません。しかし、ここでも行政官は、どの程度立ち入ることができるかにおいて制限されます。(バラード参照) 法廷は集団が「宗教」として見なされるために持つべき内容、あるいは構造について指定してはならないとされ、また、特定の広範な限度内で集団を宗教として不適格とする行為についても指定することは許されません。(モルモン教徒の事例では、一夫多妻制を教え、実践した末日聖徒の教会法人は解消され [1890年]、今日の法廷ではあり得ない判定がなされました。しかし、それでもこの激しい措置において、モルモン教が宗教ではないとは主張しておらず、ただその一夫多妻制の教えを禁止することのみに限っています。)²

シーガーおよびウェルシュの事例で法廷が行ったことは、その宗教の機能が、「すでに税金控除の対象とされている宗教の神によって満たされるものと同様のものを信奉者の人生に与えているか」どうかを検討することでした。(シーガー 対 アメリカ合衆国、30 U.S. 163) これを行うためには、部外者や離反者からのものではなく、宗教であると主張する集団の現行の信奉者が、その集団から実際に宗教的慰安を受けているかどうかを知り得る立場にある有資格の証人から提供された証拠に頼るべきです。

2.モルモン教会の法人性を解消し、その所有財産を国に没収させた1887年の法令には、「神の崇拜のみを目的として保持された…いかなる建物も…没収されてはならない。」という但し書きが含まれています。末日聖徒イエス・キリスト教会の後期の法人 対 アメリカ合衆国、136 U.S. 1, 7 (1890年)。

信奉者がその組織から得ているものが実際に宗教的慰安であるかどうかを、いかにして法廷が知り得るのでしょうか？宗教が人間や人間社会に提供するものが何であるかを定義付けたり、説明したりする専門文献は、デュークハイム (宗教生活の初歩的形態) や、ウェーバー (宗教社会学) などを始め、数多くあります。残念なことに、宗教の機能に関して著述する学者の間では、何をもって機能とするかについての意見が異なります。しかし、彼らの異なる見解は、宗教は、人生における究極の意義を信奉者に説明する人間の活動の形態であるとして、より広範な表題の下に包括することができます。(この記述に関しては著者の以前の研究にてより詳細に説明されています。なぜ保守的な教会が増大しているのか、ハーパー & ロー、1972年、1977年、37-41ページ、またなぜ教会が税金を控除されるべきか、ハーパー & ロー、197、59-69ページ)

この説明にはそれに付随するいくつかの側面があり、それらを見落としてはいけません。

- a. 集団はそれが宗教であると主張します。サイエントロジーは確かにその主張をしています。
- b. それが宗教であると主張する組織は、長期にわたって十分認識できる固定の信奉者を持ち、彼らからの自発的な寄付によって組織を支え得る信奉者の人数を持つ必要があります。サイエントロジーは確かにそのような信奉者集団を持っています。
- c. 宗教であると主張する組織は、その信奉者の欲求を満たすような、人生における根本的意義について何らかの説明を提供しなければなりません。それは極めて重要な問いで、自称宗教であるサイエントロジーの信奉者を広範にわたって面談する必要性に駆られました。その調査の結果は何でしょうか？

セクション V: 思想体系

サイエントロジーは人の体験上でのさまざまな側面を解釈して説明する、広大かつ非常に精密な思考のシステムを提供します。膨大な数の書籍を用いて、勉学を基にするその在り方は新しいスコラ哲学であり、自らの体験を系統立てて概念化や体系化をしたり、知覚化することを好む人々にとっては魅力のあるものです。それは「神」あるいは「至高の存在」についての特定概念を教えることはしませんが、むしろ壮大にかつ漠然と「第8のダイナミック」として取り上げます。それは人がそのエネルギーを費やす8段階の対人関係における最高段階ですが、いかにして、その「ダイナミック」に到達するかについては多く説明されておらず、またそこで何を発見するかも説明しません。

しかし、サイエントロジーは信奉者に彼らが輪廻転生する「精神的存在」であることを明白に教えます。または信奉者がそれを自ら発見することを可能にします。この中核的教義または発見は、回答者のほとんど全員によって自覚されており、この点を見るだけでも非宗教的哲学や心理学との違いが大きく表れています。それはいくつかの宗教の特徴とされる概念であり、非宗教的な思考のシステムとは事実上異なります。

さらに要点として、この現実性の観点とそれに付随する示唆は、信奉者のほとんどが持つ究極の意義に対する渴望に応えます。何人かの回答者は、自らさまざまな宗教を次々に試しては失望してきた「探求者」であるとして、サイエントロジーに出会って初めて満足感を得ることができ、その後も継続して得ていると答えています。彼らの内のひとり、「そういった種類の質問が私を煩わすことはもうありません。」と述べています。

サイエントロジーは、あらゆる神学的問いに対する特定の答えを（承認済の宗教のいくつかが持つ答え以上には）持っていませんが、人の存在は基本的に意義があり、信頼できる枠組みの中にあり、目的に満ちた人間的活動を行うことが、可能かつ有効であることを信奉者に確信させているようです。

人生における究極の意義に関する信奉者の懸念を（明白に答えることなく）効果的に和らげているということから見て、サイエントロジーは宗教であり、機能的には非常に有効な宗教です。上記セクション IV での分析によると、これは、宗教すべての中の一宗教として唯一必要かつ充分な特性です。そしてそれはその他のどのような人間の活動形態にも当てはまりません。信奉者のすべてがこの成果やサービスを求めてサイエントロジーにやって来たわけではありません。また、すべての人々がこの洞察のレベルに達したわけでもありませんが、それはすべての宗教にも言えることです。以前の宗教で感じた当惑を、サイエントロジーにおいても感じ続けていると答えた回答者は誰もいませんでした。当惑し続けたけれどもそれを認めなかった人も中にはいたかもしれません。しかし恐らくそれらの人たちは、サイエントロジーから離脱し、何人かがそうするように他の所で探求し続けているでしょう。それは、サイエントロジーが、そこに留まっている人たちに対して宗教の機能を果たしているという事実を疑うものではありません。

サイエントロジーについて疑う余地のない知見に加えて、それ自体は特性ではありませんが、以下のように他にもサイエントロジーが宗教であるという結論を補助する事項があります。

1. 「オーディティング」における「懺悔」的特徴。
2. それが（客観的に真実であるか否かは別として）、人間は本質的に善であるとする教義。
3. 対人関係における倫理の重視。
4. 薬物中毒から人を回復させる能力。
5. 教会員による結婚式の挙行。
6. 「他人を援助する」ことに焦点を当てた教会による高齢者プログラム、精神衛生療法としての電気ショック療法や前頭葉切除に対する反対姿勢など。

ディーン M. ケリー
1980年
更新：1996年6月

